

スーダン国際平和協力業務に従事する要員の「現地からの声」

国連スーダン・ミッション（UNMIS）に派遣中の田中裕宣3佐及び山田浩一3佐の2名は首都ハルツーム市内にあるUNMIS司令部において、2008年10月～2009年4月まで国際平和協力隊員として業務に従事しました。今般、半年間の任務を終えて帰国するにあたり、お二人から話を伺いました。（聞き手：UNMIS 齋藤昌子（元内閣府PKO事務局国際平和協力研究員））

軍事部門司令部兵站幕僚としてUNMISの活動に対する後方支援の調整を担当する田中3佐。

所属する「J4」の任務は、作戦上の要求を考慮しつつ、兵站支援の優先順位をつけ、各セクターとISS（統合支援サービス部：Integrated Service Support）間で行われる兵站上の調整を容易にすることです。



「誰のために仕事をするのか。実際に自分の目で見て感じる事が大切です」。そう語るのも、自ら最前線のチームサイトに何度も足を運んだ経験から。UNMISは大きな組織。司令部にいるとレポート作成や会議ばかりの毎日になってしまいがちです。「南部セクターでは日々の生活でさえかなり難しいところがあります。最前線で活躍するチームサイトの業務がスムーズに進むように、水、食糧、住居等の生活関連物資や軍事監視要員の装備品がうまくいきわたっているか、ニーズにあっているかをモニターして調整するのが我々の役目。この半年の間、実際に各セクターに足を運ぶことで、ハルツームとはまったく異なる南部の現状を見ることができたのは有益でした。さらに現場を訪ねることで、自分の業務がどう現地の人のためになっているのかを肌で感じる事ができました」。

一方、日々の業務を進める上で困難だったのが言葉の壁。オーストラリア、エジプト、バングラデッシュ、ケニア、インド等、多国籍の同僚と一緒に仕事を進めなければなりません。分かりにくいと感じたときにはメールや書類で再確

認する等、業務に支障が出ないように心がけました。「日本人の強みである誠意と思いやりを持って互いに調整すれば、言葉の壁を乗り越えて分かり合うことができると思います」。

仕事以外の場では、知り合いや在留邦人と食事に行ったり、同僚が主催する交流会に参加してネットワークを広げたり、テニス等のスポーツを楽しみました。「刺身や寿司が恋しくなりますね」と言うのも、ハルツームには中東料理のファストフード店が多く、時には口に合わないものがあったからだそうです。

2005年にイラク復興業務支援隊で活動したことがあり、海外での任務は今回のスーダンが二回目です。自衛隊の海外派遣が本来任務化され、スーダンに限らず将来海外任務に参加する自衛官に対しては、「自衛隊で今までやってきた教育訓練を普段どおり着実に遂行すればどこでも通用します。日々しっかりと目の前の訓練に取り組むことが重要だと思います」。

そして文民として国際平和協力分野で活動したいという日本人に対しては、「文民として活躍する日本人は能力が高く、組織の原動力として頑張っています。興味を持っている人は飛び込んでみてはいかがでしょうか。その際には是非日本人としての謙虚さと思いやりを忘れずに」とのメッセージをいただきました。

山田 3 佐は統合任務分析センター（JMAC）情報幕僚として、UNMIS 司令部のデータベースの保守管理を実施しました。

JMACの任務は二つ。まず、UNMISの上級管理者及び主要部署に対する戦略的分析を提供すること。次に、中長期的な分析・評価に必要な情報を融合すること。その中でも山田 3 佐は主に二つ目の任務に携わり、分析担当者が分析に活用しやすいよう、データベース画面の改善等の維持管理を行いました。

「今担当する『データベース維持管理』の仕事は自分が着任するまで空席だったため、何を実施するか、どのように進めていくか、ゼロから立ち上げる初期の段階がもっとも大変でした。上司や同僚と議論を重ねて形にすることができたという点でたいへんやりがいのある仕事だったと思います」。

初期の立ち上げ時期を過ぎると、比較的単調な業務が続く時期もありました。しかし、どうすればミッションにより貢献することができるかということをお頭に、データベースの改善に取り組んだりして日々の仕事に工夫を加えるようにつとめたそうです。



田中隊長同様に、バングラデッシュ、ネパール、インドをはじめとする様々な国籍のスタッフと職場を共にしたので、やはり言葉で苦労する場面もありました。全員が英語を母国語とする人ではないため、同僚に書類や文章を口頭で読んでもらって彼らの発音の癖を知る等、各国の独特のアクセントに慣れるまでに時間がかかりました。

初の海外赴任という山田3佐。スーダンへのイメージは「ハルツームは思ったよりも過ごしやすく、物が豊富。贅沢を言わなければひと通り揃うし、生活に困ることはないでしょう」とのこと。私生活では主に自炊で過ごし、同僚や在留邦人と時々外出に出かけることもありました。その他、週末にはテニスやサッカー、ナイル川沿いをジョギングしたりすることで健康管理にも留意しました。ハルツームでは乾燥がひどく気温も高いため、体調を崩さないように日々自己管理につとめることの重要性も語ってくれました。

半年間の任務を終え、「初めての海外赴任で、日本を外から客観的に眺めることができました。様々な国の人と出会いましたが、彼らの日本に対する評価がとても高いのが印象的です。日本にいとあまり気づかないかもしれませんが、日本は経済力をはじめとして国際的に存在感がある。謙虚であることは日本人の美德の一つでもあります。日本人はもっと自信を持ってよいのではないのでしょうか」。さらに、「日本はアジアに位置し、西洋の価値観も理解する先進国。日本人は、そこからうまれる絶妙のバランス感覚を無意識のうちに身に着けているような気がします。そのバランス感覚をうまく活用して、日本のよさを世界に向けてもっとアピールしていくことができれば、世界の中の日本の存在感をより高めることができるのではないのでしょうか」。

「UNMISは展開するPKOの中でも、かなり大規模なミッションです。いろんな部署の方と出会うことができ、様々な仕事を見ることができたことも有意義でした。また、今回初めてのPKO参加を通して国際貢献に関わることができたという貴重な経験を、日本に帰国してからいかしたいと思います」。

以上